

## 自信について

第一学期の終業式がすんで、一日おいた七月二十一日から六日間にわたり、五・六年生のために臨海教育を行なった。恒例により、五日日には一キロの遠泳も実施され、四十六名（うち女子十一名）が参加したが、全員無事所定の距離を泳ぎきった。途中でずいぶん苦しそうにしていた子も何人かあり、また後尾に一人引きはなされた子もあったが、そういう子たちも、ゴールに泳ぎつき、元氣な足どりで砂浜にあらがっていった。

私は終始、舟の上から子どもたちの力泳ぶりを見ていたが、あの小さなからだのどこから、あんな力がわいてくるのか、いぶかしくも思われたが、最後に一人泳ぎついた五年生の男の子が、波打際をはなれてゆく後ろ姿に、力いっぱい拍手をおくりながら、ふと熱いものがまぶたをついて出てくるのをおぼえた。言いようのない感動が胸の底からわきおこってきたためと思われる。

この感動の出どころをあとで反省してみた。あの小さなからだにどれほどの力も宿ってはいない、と早合点するのは、おとなの不遜というものである。人間は、ある状態におかれると、自分でも意識しない力が、どこからともなくわきおこってくるものらしい。「全力をつくす」という

ことばがあるが、文字どおり「全力」をつくせば死ぬほかないが、これは一種の強調表現で、自分でもわからぬ力が、ある状態においてわいてきて、ひとつの仕事を成しとげたとき使うことばであろう。何事にもあれ、人間が一番りっぱに、また美しく見えるのはそういう力につき動かされて、事をなしあげてゆくその人の姿を前にしたときである。

「自信」というのも、そういう体験をくり返してゆくうちに、おのずから築かれてゆくものらしい。「自信を持って」と結果だけを責めてもはじまらぬわけである。

(昭和四十年九月)